

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 福音の証者

——マタイ伝第5章44節、7章6、12節、9章13節——

1992年5月24日

小池辰雄

祈り 福音の証者賀川豊彦 「9月10日」敵をも愛する 「9月17日」人を審かぬこと 「9月19日」  
黄金律 「9月24日」我は罪びとを招かんとて来れり

## 【マタイ】

「44されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天に在す汝らの父の子とならんためなり。」(マタイ5・44)

「6汝ら人を審くな。審かれざらんためなり。」(マタイ7・6)

「12それゆえ人々が汝らになさんことをおよそ願うかぎりのことを、その如く人々にせよ。これこそが律法であり預言者である。」(マタイ7・12)

「13汝ら往きて学べ」「われ憐れみを好みて犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。

我は義しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり。」(マタイ9・13)

## ● 祈り

お祈りいたします。

主さま。去る5月16、17日の京都に於ける全召団の有志の会をあのようから終りまで、あなたのご愛をもつて貰ってください、ありがとうございます。集まって来た人たちはそう多くはありませんけれども、しかし、本当に我々の杯は溢るるなりで、我ら自身があなたの聖霊の杯となり、また、愛の杯となり、生命の杯となって、満たされたことを感謝いたします。皆、喜んで散じていきました。すべてにおいて、あなたの聖名が讃えられたことを感謝いたします。

今日は、その意味において、京都に参じられなかつた兄弟姉妹たちに、この話をまたさせていただけます。どうぞ、始めから終りまで、あなたが親しく聖言、御霊をもって導いてくださるように願ひ奉ります。とかく欠席が多いですが、どうぞ、兄弟姉妹たちが日曜を期して、少し具合が悪くてもここに来てあなたのみ力に与ることができまますように、願ひ奉ります。心からの感謝と讚美、聖名に在って捧げ奉る。アーメン。



## ●福音の証者賀川豊彦

日本の新教、プロテスタントの歴史で先駆者は新島襄です。同志社大学を建設した方、群馬県の安中の人です。吉田松陰が渡米に失敗して、その後で、新島先生がこれに成功した。新島先生は実はクリスチャンではなかった。目的は別な意味であつたけれども、アマースト大学で勉強したときに、シーリーという先生に福音のことを承つて、そして、十字架の贖いのことをすっかり受けとつた。シーリーさんによって救われたひとです。その後で出掛けていった内村鑑三先生がやはりアマーストでもつてシーリー先生にぶつかつて、それで十字架の福音が分かつた。だから、新島襄、内村鑑三はアマースト大学でシーリー先生から救いを受けた。そういう忘れることのできない歴史があるわけです。

新島先生のこととはまたいつかお話することがあると思いますが、その内村先生のまた後輩となつて、藤井武先生——私が直かに教わつた——それと同年に生まれた人で、賀川豊彦先生がいるわけです。賀川豊彦はおよそ無教会とは型の違つたかたです。無教会は、何かというと、インテリの人たちへの福音の宣伝が主流です。ところが、賀川先生は社会のどん底の人を相手にして福音を伝えた。福音の証者としては、賀川先生が第一人者です。それで、私は賀川先生のことを語つたわけですが、その大事な点を、彼の生涯を跡づけながら学びたいと思います。

賀川豊彦のお父さんは賀川純一というんですが、運送の商売をやつていた。奥さんとうも性格が合わない。それで、芸者の益栄ますえとの間に子供ができるわけです。だから、これはみな私生児というわけだ。端一、栄、三番目がこの豊彦なんです。お父さんが豊受大神とようけを拜んでいたらしいんで、豊受大神のお蔭だといつて、その子を豊彦と名づけて、

「この子は出世するよ、神さまの子なんだ」

と、不思議なことを口走つた。それで、小柄なんだけれども、なかなか強いとみえて、相撲なんかとると、勝つてしまう。まだ小学校に入るか入らない位の頃です。「お前は強いよ、だけれど妾の子じゃないか」と言つてけなすわけです。そのうちに、お父さんも芸者のひとも相次いで亡くなつてしまふ。それで豊彦は除け者にされるわけです。…(割愛。『霊界の星々』「賀川豊彦——愛の使徒——」1998年刊参照) …

…最後は、病院で亡くなるんですが、賀川先生という人は、そういう愛の方であつた。

## ●「9月10日」敵をも愛する

著作集第十巻の326頁、9月10日「敵をも愛する」の項、

「されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ

天に在すいま汝らの父の子とならんためなり。」(マタイ5・44)

敵をも、何をも全部、賀川さんは本当にいかなる人をも愛していった。自分を殺そうとする危ないやつも。そして、絶対無抵抗でもつて行つた。正に体で証明からだした人です。キリ



ストの聖霊の愛が本当に満つると、そういうことができる。さきほど、コリント前書13章を読んだ。パウロが、

「たとえ何々であろうとも、愛がなければ……」

と言つて、全部それをひっくり返している。パウロは「たとえ何々であろうとも……」というあの仮定が全部、パウロは自分ができるとです。もの凄い霊的な賜物がありますから。

「自分はそれができても、もし私に愛がなければ、そういったものはダメなんだ。

愛が一番大事なんだ」

ということですよ。あの信仰の戦士であるパウロが、本当にキリストの愛でもって貫いた。彼の伝道は正にそういった愛の伝道です。何回も彼は鞭うたれて、普通なら死ぬところですが、けれども、それは聖霊の力でもって彼はそれに打ち勝った。コリント後書11章にたくさん

### ●「9月17日」人を審かぬこと

それから、第十卷の335頁、マタイ伝7章6節のところ（9月17日「人を審かぬこと」の項）。

「汝ら人を審くな。審かれざらんためなり。」（マタイ7・6）

私は、この「審くな。審かれざらんためなり」というこの句を読みながら、サツと来たんです、「汝ら人を審くな」よりも、もう一つ先のことを、

「汝ら人を赦せ」

と。審くというのは禁令ですけども、赦せと。これは審くどころではない。

「赦してやれ」

と。キリストの十字架で我々は徹底的に赦されている。自我という、我執という罪を赦されている。これが贖いです。だから、キリストに赦されている者が人を赦すことができな

### ●「9月19日」黄金律

今度は、第十卷の337頁、9月19日「黄金律」の所、

「それゆえ人々が汝らになさんことをおよそ願うかぎりのことを、その如く

人々にせよ。これこそが律法であり預言者である。」（マタイ7・12）

「律法であり預言者である」

ということよ

「旧約聖書の成就である」

ということ。これも愛です。仏教でいうと、「慈悲心」だ。孔子も孟子も「仁」と言った。キリストは「愛」。要するに人助け。救い上げる。その極致はキリスト十字架の贖罪愛です。



そこにマキシミリアン・コルベ神父のことが書いてある。或る囚人が「助けてください」と乞うた。そしたら、コルベ神父が「私が代わりになる」と言つて、アウシュヴィッツの牢獄で殺されようとした人の身代わりとなつて死んでいった。

「その友のために口を捨つる、これより大いなる愛はなし」  
を、そのまま実践した人です。

●「9月24日」我は罪びとを招かんとて来れり

第十卷の344頁、9月24日「我は罪びとを招かんとて来れり」のところ、

「汝ら往きて学べ」「われ憐れみを好みて犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は義しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり。」(マタイ9・

13)

この「憐れみを好みて犠牲を好まず」というのは、

「いわゆる宗教的な行事ではないぞ。生活の上で人を本当に愛し憐れんでいるか、

そこが私の宗教なんだ」

というキリストの言葉です。

「天国はここやあそこにあるのではない。お前たちの中にあるじゃないか」

と、みんなそうです。山上の大告白の第一言の、

「恵福なるかな、霊の貧しき者……」

というのは非常に大事な言葉ですが、その次は、

「恵福なるかな、憐れみある者、その人は憐れみを受けん」

という言葉です。憐れみは要するに愛の世界ですから。愛の極致は、何といつても、十字架上のキリストの言葉ですけれども。十字架に架かりながら、自分の身の血を流しながら、

「彼らを赦してやってください」

と、これは最大の言葉です。自分を殺すやつを、殺されながら、

「赦してやってください。為すところを知らず」

と。そういう、

「血のバプテスマを受けて、それから私はお前たちに本当にもう怖いものをやるぞ」

というのが聖霊ですから。そして、聖霊が来て、この聖霊を受けとらないで、ただ「十字架、十字架」と言つて、それも観念的だったら、これはどうにもならん。ところが、十字架を否定しているとしてもないやつがある。

要するに、本当に十字架を受けとり、聖霊で行く人は——お互いに躓いたり転んだりすることはあるさ、人間だから——けれども、どこまでも行く。キリストの福音が「原理」でもって説明なんかできるか、冗談じゃない。

賀川豊彦のことは、今度の「エン・クリスト」51号に私はびつちり書きます。

